『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究：最初期の作例から見る顧客環境

Manuscrits enluminés de la *Bible française du XIIIe siècle* : quelques considérations sur le milieu clientèle au travers des premiers témoins

駒　田　　亜紀子

1. はじめに
2.『十三世紀フランス語聖書』初期写本研究の課題
　（1）成立年代、編纂主体、成立の背景
　（2）初期写本伝承
3. 問題の所在と美術史学分野からの研究の展望
　（1）Fr. 899 の制作年代
　（2）現存最古の作例
　（3）初期写本伝承の“第 2 世代”
　（4）福音書初期写本伝承の“第 1 世代”
　（5）創世記初期写本伝承の再検討
　（6）彩飾画家のレパートリーと顧客層
　（7）13 世紀第 3 四半期パリにおける“大学写本”との比較考察
4.『十三世紀フランス語聖書』初期写本と“大学写本”ならびに世俗写本の比較分析
　（1）俗語訳写本における註解の位置付け：
　　“二次元的”レイアウトから“一次元的”レイアウトへ
　（2）イニシアル内挿絵（物語イニシアル *initiale historiée*）とカラム（段落形式）挿絵
5. 結語

1. はじめに

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、13 世紀中葉～ 60 年代前半にパリで成立した、初の完訳版フランス語聖書である [1]。今日、断片を含め、1260 年代後半から 15 世紀後半にかけて制作された 30 点余の写本作品が伝存するが、その多くは何らかの挿絵彩飾を伴う作例である。

『十三世紀フランス語聖書』をめぐっては、1884 年にサミュエル・ベルジェが発表した基礎研究以来、文献学サイドの主導のもと、研究が進められてきた。その一方で、これまで幾つかの写本作品に個別に言及するにとどまってきた美術史研究分野においても、近年になり、13 世紀後半～ 14 世紀前半の作例を同時代の彩飾写本研究の文脈に位置付けた考察が発表されている [2]。2013-14 年にかけて刊行されたフランス･ゴシック期（1260-1320）彩飾写本カタログの第 2 部において、A. ストーンズは、ラテン語聖書の制作地域別の比較考察に続き、『十三世紀フランス語聖書』の主要な作例を挿絵主題対照表と図版により概観し、この時期のフランス写本彩飾における同聖書の展開に改めて関心を示した [3]。

本稿では、以上のような研究動向を踏まえ、近年著しい進展を見せる各種のオンライン研究ツールと、2015 年度に筆者が従事した在外研修における調査に基づき、従来の研究では漠然と指摘されながらも具体的な検証が行われてこなかった、『十三世紀フランス語聖書』初期写本の顧客環境に光を当てたい。

2.『十三世紀フランス語聖書』初期写本研究の課題

（1）成立年代、編纂主体、成立の背景

『十三世紀フランス語聖書 *Bible française du XIIIe siècle*』は、サミュエル・ベルジェが 1884 年に公刊した中世フランス語聖書研究の第 3 部において、13 世紀中葉にパリで成立した散文体フランス語によるラテン語ウルガータ訳聖書の初の全訳テクストを指して命名した、写本テクストである [4]。ベルジェは、失われた原本に最も忠実かつ最初期の作例として、パリのフランス国立図書館フランス語 899 番写本（以下、Fr. 899 と略す）（図 1）を挙げ、その本文・註解の内容やテクストの言語学的特徴などを分析・記述した [5]。『十三世紀フランス語聖書』の成立年代および編纂主体については、Fr. 899 本文と 13 世紀前半～中葉に制作された（とベルジェの考える）ラテン語聖書のそれとの詳細な比較考察に基づき、13 世紀第 2 四半期のパリ大学と結論づけた。仏語訳の底本となったラテン語聖書が 13 世紀第 2 四半期（1226 年頃？）にパリ大学で行われた改訂に基づく版であること、Fr. 899 が、「イニシアル、ランニング･タイトル、章番号、および挿絵の全ての点において」、「パリ大学内において 1250 年より少し前に筆写されたことが確実な」（とベルジェの考える）パリのドミニコ会修道院の大型 4 巻本聖書（パリ、フランス国立図書館ラテン語 16719-16722 番写本）のそれに類似すること、がその根拠である [6]。また、Fr. 899 の本文余白に書き込まれたアルファベットの略号に触れ、同写本が（世俗の信者の）勤行（dévotions）における聖書読誦（leçons）に使用された可能性を指摘している [7]。

これに対し、1978 年オクスフォード大学に提出した博士論文において『十三世紀フランス語聖書』

の福音書の校定版を編集したC.スネッドンは、同聖書はドミニコ会の関与の下で1230-60年頃に編纂されたとの仮説を提示した。『十三世紀フランス語聖書』の福音書の註解の一部が、13世紀第２四半期に２期にわたりドミニコ会のパリ管区長を務めたユーグ・ド・サン＝シェール（1263年没）が1230-36年頃に執筆した聖書註解に依拠することが、その主たる根拠である[8]。スネッドンは、その後、同聖書の成立背景についてより踏み込んだ推測を行い、2002年に発表した論文では、Fr. 899本文の言語学的特徴に基づき、フランス王ルイ９世の娘の１人イザベル（1242-1271）の教育を担ったオルレアン近郊モンタルジ Montargis のドミニコ派女子修道院のために同聖書が編纂された可能性を示唆している[9]。

一方、1988年に『十三世紀フランス語聖書』の創世記の校定版を刊行したM. クルイユは、同聖書の成立年代や編纂主体についてはベルジェおよびC.スネッドンの仮説を確認するにとどまるが、同聖書が異端の環境において使用された可能性については、註解の内容に基づきこれを否定している[10]。

『十三世紀フランス語聖書』の顧客（読者）については、上記にその概要を記した仮説に見られるように漠然とした推定にとどまり、具体的な資料に基づく考察は未だなされていない。ただし、ベルジェが1884年に刊行した研究書の第４部において既に指摘しているように、『十三世紀フランス語聖書』の後半部（箴言～黙示録）は、同聖書の制作が下火になった1310年代にパリの写本市場に登場した『増補版歴史物語聖書 *Bible historiale complétée*』の後半部に組み込まれることにより、当時台頭しつつあった富裕な世俗の読者の間に普及することとなった[11]。

（2）初期写本伝承

サミュエル・ベルジェが『十三世紀フランス語聖書』に関する基礎研究を発表した1884年当時、同聖書テクストを完本（創世記から黙示録までの聖書全書）の状態で収録した写本の存在は知られておらず、またベルジェが本文の言語学的分析に基づき同聖書研究の筆頭に位置付けたFr. 899は、知恵文学・預言書～マカバイ記を含む旧約聖書後半部および新約聖書の公同書簡後半部～黙示録を欠き、創世記や福音書に伴う註解も意図的に省かれた、不完全な写本であった[12]。こうした条件の下で、ベルジェは、『十三世紀フランス語聖書』の初期写本伝承を知る上で重要な作例として、聖書前半部（創世記～詩篇）については、Fr. 899に加え、パリのアルスナル図書館5056番写本（以下Arsenal 5056と略す）、ロンドンの大英図書館Harley 616番写本（以下Harley 616と略す）、ケンブリッジ大学図書館E.e.3.52番写本など５写本を、聖書後半部については、同じくFr. 899に加え、パリのマザラン図書館35番写本、パリのフランス国立図書館フランス語12581番写本（福音書のみ収録；以下Fr. 12581と略す）、オクスフォードのクライスト・チャーチ図書館178番写本（新約聖書のみ収録；以下ChC 178と略す）[13]、ルーアン市立図書館185番写本（以下Rouen 185と略す）[14]、ブリュッセルのベルギー王立図書館10516番写本（以下KBR 10516と略す）[15]など８写本を、それぞれ指摘した[16]。

『十三世紀フランス語聖書』初期写本伝承に関する研究は、20世紀に入り、ベルジェ当時は存在が知られていなかった何点かの写本、就中1280年代初頭～14世紀初頭の間にパリで制作された３点の完本が作品コーパスに加わることにより、新局面を迎える。C.スネッドンは、1978年提

出の博士論文とその後に発表した雑誌論文において、福音書テクストの初期写本伝承を図式化したステマを提示した。このステマは、失われたオリジナルに最も近い写本群 *x* と、これより派生した2つの独立した写本群 *a* および *b* を骨子とするもので、写本群 *x* にベルジェが言及した Fr. 12581、ChC 178、Rouen 185 にベルン市立図書館 28 番写本（以下 Bern 28 と略す）[17] を加えた計 4 写本を、写本群 *a* に KBR 10516 とサン・トメール市立図書館 68 番写本（以下 St-Omer 68 と略す）[18] の計 2 写本を、写本群 *b* に Fr. 899、マザラン図書館 35 番写本、完本のニューヨークのモーガン図書館 M 494 番写本（以下 M 494 と略す）[19] および大英図書館 Y. Thompson 9 番写本（Harley 616 を前半部とする完本の後半部）の計 4 写本を、それぞれ分類するものである [20]。

一方、1988 年に『十三世紀フランス語聖書』創世記の校定版を刊行した M. クルイユは、ベルジェの言及する初期写本のうち Arsenal 5056、Harley 616、Fr. 899 およびケンブリッジ大学図書館本の 4 点のみを対象に、創世記テクストの初期写本伝承図を提示した。このステマは、失われたオリジナル *O* と、これより派生した 2 系統 *X* および *Y* を骨子とするもので、系統 *X* に Arsenal 5056 を、系統 *Y* が更に 2 枝に分岐した一方の枝に Harley 616（とその“子孫”のケンブリッジ写本）を、他方の枝に Fr. 899 を、それぞれ分類するものである。ただし、このステマでは、Harley 616 の他に現在 2 点知られている完本の M 494 およびシャンティイのコンデ美術館 4 番写本や、ベルジェには存在が知られていなかった初期写本の一つベルン市立図書館 27 番写本（以下 Bern 27 と略す）は、全く考慮されていない。また、M. クルイユが校定版の底本としたのは本文の異同において孤立した作例 Arsenal 5056 であり、校定版の編集にあたり参照した写本はステマに含まれる 4 写本のみである [21]。

3. 問題の所在と美術史学分野からの研究の展望

『十三世紀フランス語聖書』の需要は、現存する写本点数（断片を含め 30 点前後）とそれらの制作年代（大半は 1260 年代後半～ 1310 年代の制作）、特に完本（1280 年代初頭～ 14 世紀初頭にパリで制作された 3 点）と聖書前半部（創世記～詩篇）を収録した初期写本が合わせて 10 点ほどしか現存しないという事実から推測する限り、比較的短命に終わったと考えられる。1310 年代以降パリで急速に普及した『増補版歴史物語聖書』により、その地位を取って代わられたためであろう。こうした事情が、成立年代や編纂主体あるいは編纂当初に想定された読者（顧客）層の探究や初期写本伝承の解明など、文献学研究における重要な課題の議論を困難にしてきたことは否めない。

本章では、前章で概観した『十三世紀フランス語聖書』初期写本に関する文献学分野における課題を踏まえ、これらの研究では考察の射程外に置かれがちな美術史学的な見地から、同聖書の初期写本をめぐる問題の所在と今後の研究の展望について、改めて整理したい。

（1）Fr. 899 の制作年代

A. ストーンズは、同写本の制作年代について、かつて R. ブラナーにより〈バーリ・アトリエ〉と命名された同写本の逸名の挿絵画家 [22] の他の作例との比較に基づき、「1270-80 年代あるいは更に後」を示唆する [23]。Fr. 899 は、聖書各書の冒頭に置かれたカラム挿絵が全て切り取られているため、

彩飾の分析はペン装飾イニシアルと詩篇に残る小型の物語イニシアルに依拠せざるを得ない。詩篇第1篇冒頭の物語イニシアルLから余白に蔓状に伸びるアンテナ装飾の大振りな鋸歯状の刳形(図1)は、1270年代後半～1280年前後のパリ写本彩飾に見られる特徴を示しており[24]、Fr. 899の制作をこの時期に位置付ける論拠となる。

(2) 現存最古の作例

筆者は、2015年にリスボンの国際研究集会で行った口頭発表とこれに基づく雑誌論文において、文献学研究ではこれまで等閑視されてきたポルトガルのエヴォラ公立図書館Cod. CXXIV/1-1番写本（創世記～詩篇を収録；以下Evora写本と略す）（図2、3）について、挿絵彩飾ならびにペン線描装飾の様式、本文の書体、本文および註解のレイアウト等の分析に基づき、同写本は1265-70年頃パリで制作された現存最古の『十三世紀フランス語聖書』の作例であることを論証した[25]。Evora写本については、A.ストーンズも2014年刊行のカタログにおいて、『十三世紀フランス語聖書』現存最古の作例であることを示唆している[26]。

(3) 初期写本伝承の“第２世代”

ベルジェが『十三世紀フランス語聖書』初期写本研究の筆頭格とするFr. 899が、M.クルイユとC.スネッドンがそれぞれ提示する創世記と福音書の初期写本伝承系統図（ステマ）のいずれにおいても、失われたオリジナルから派生した“第2世代”に位置付けられるという事実は、現存最古のEvora写本に約10年遅れる推定制作年代とも整合するように思われる。C.スネッドンのステマにおける写本群*a*に属する2写本（KBR 10516、St-Omer 68；パリ、1270年代中葉）が、彩飾様式、挿絵図像のいずれについても“姉妹写本”と呼びうるほど近い関係にあるという筆者の見解[27]もまた、文献学・美術史学双方による異なる視座からのアプローチが高い次元において整合性を持つことの一例であろう。同様に、C.スネッドンの写本群*b*（Fr. 899、マザラン35番写本、M 494、Y. Thompson 9番写本）も、挿絵が全て切り取られているため分析が困難なマザラン35番写本を除き、挿絵彩飾の様式分析より1270年代後半～1280年代中頃のパリに位置付けられる、同質性の高い写本群と言えよう。

(4) 福音書初期写本伝承の“第１世代”

一方、C.スネッドンの提案する福音書ステマの“第1世代”写本群*x*（Fr. 12581、ChC 178、Rouen 185、Bern 28）については、4写本の制作年代を1270年代後半～1280年代中頃に位置付けうるという点を除けば、美術史学的見地からは異質性の際立つ写本群である。南ネーデルラントやイングランド南部の写本彩飾の影響が顕著で他に類例を見ない独自の挿絵サイクルを展開するChC 178、I.エスカンデル＝プルーストの最新の研究に拠れば[28]アラゴン王のためにカタロニアで制作された可能性の高いBern 28、パリで活躍する2人の彩飾画家と北フランスのカンブレー周辺で個人用の祈祷書や世俗写本の挿絵彩飾を手がける画家との協働により（ノルマンディで？）[29]制作されたRouen 185、シャンパーニュ伯の蔵書の“縮刷版”として制作されたと思しき1284年筆写のアンソロジー写本Fr. 12581が、失われたオリジナルに最も忠実な写本群を構成するという仮説に

対しては、テクスト編纂の地とされるパリと4写本との結びつきが他の写本群に比べ希薄であるという点も考慮に入れた、慎重な検証が求められよう。

(5) 創世記初期写本伝承の再検討

筆者は、2015年にリスボンの国際研究集会で行った口頭発表に基づく雑誌論文において、M. クルイユによる『十三世紀フランス語聖書』創世記校訂版の編集に際し全く考慮されなかったEvora写本（図2、3）とBern 27が、Arsenal 5056、M 494、Harley 616、Fr. 899およびケンブリッジ大学図書館本の5写本において語句の欠落や誤写のために意味不明となった文言をほぼ完全な状態で伝えていること、Evora写本とBern 27の本文は相互に非常に近い関係にあり、上記5写本の中ではFr. 899に最も近いこと、ラテン語註解付聖書特有のレンマ（註解の対象となる一連の語句。聖書本文中にあっては参照記号や下線あるいは朱インク等により明示され、註解の内部に引用される場合もある）[30]の痕跡をとどめる、他の写本に類例の無い独特の註解レイアウトを採用していること、などを論証し、両写本が失われたオリジナルに最も忠実な作例である可能性を指摘した[31]。ただし、Evora写本とBern 27は聖書本文・註解の異同およびそれらのレイアウトに関しては非常に近い関係にあるものの、後者の制作環境は前者とは全く異なると考えられる。写本冒頭部の本文書体とその言語学的特徴からイタリア系の写字生が筆写したと推測される本文、様式分析からは制作地の推定が困難な独特のペン線描装飾、ドイツ系の画家により制作された挿絵、余白の随所に書き込まれた同写本固有の注釈は、Bern 27が極めて特殊な状況下で制作されたことを示唆する[32]。創世記の初期写本伝承系統図におけるEvora写本とBern 27の位置付けを議論することは筆者の能力を遥かに超える問題であるが、創世記の初期写本伝承の再検討に両写本の果たす役割は大きいと考える。

(6) 彩飾画家のレパートリーと顧客層

Evora写本を詳細に論じた2015年の口頭発表とこれに基づく雑誌論文において、筆者は、同写本の挿絵彩飾を担当した逸名の彩飾画家、通称〈デュプラの画家 Maître Duprat〉のレパートリーを改めて検証した。その結果、32点の帰属写本中、仏語訳ローマ法令集6点、平信徒用の祈祷書2点、仏語訳『十字軍遠征記』1点、アヴィケンナやガレノスのラテン語訳医学書2点など、1260年代以降パリの彩飾写本市場に浸透し始める世俗用途の写本作品、就中仏語訳ローマ法令集の占める割合が、同時代に活躍した他の画家に比べ、高いことを指摘した[33]。Evora写本に見られる特殊な書体や註解を表示する段落記号（図3）（pied-de-mouche）は元来ローマ法令集に特有の書記記号であり、〈デュプラの画家〉が行政分野の写本制作に通じた書籍商と関わりのあったことを示唆する。Evora写本の読者も、〈デュプラの画家〉が得意とした仏語訳ローマ法令集に代表される新興分野の世俗写本の顧客層に、求めることができるのではなかろうか。

(7) 13世紀第3四半期パリにおける“大学写本”との比較考察

『十三世紀フランス語聖書』をめぐる未解決の論点の一つに、成立環境をめぐる議論がある。ベルジェは仏語訳の底本となったラテン語聖書のパリ大学における改訂のプロセスを詳述し、『十三

世紀フランス語聖書』が「パリで、大学において、1226 年～ 1250 年頃の間に」編纂されたとする[34]。しかしながら、現存最古の Evora 写本の制作年代（1265-70 年頃）とこれに続く作例の制作年代（1270 年代中葉：KBR 10516、St-Omer 68）を鑑みるならば、同聖書の成立時期は 13 世紀中葉～ 1260 年代前半とするのが妥当と思われる。また、ベルジェは『十三世紀フランス語聖書』が「パリ大学において成立した（faite à Paris, dans l'Université）」とするが、13 世紀第 3 四半期頃にパリ大学で使用されていた代表的な“大学写本”[35] と我々の仏語訳聖書の初期写本との間に、物理的な体裁等において共通する特徴が認められるか否かについては、筆者の知る限り、具体的な考察はなされていない。この問題視座は、『十三世紀フランス語聖書』の初期写本の受容（顧客）環境を推測するための手掛かりとなりうるのではなかろうか。

以上に整理した問題視座とその展望は、いずれも、これまで文献学において優先的に議論されてきた『十三世紀フランス語聖書』のテクストに加え、個別の写本作品を物理的に構成する様々な要素に改めて注目するものである。次章では、上記に挙げた問題視座のうち、現状では具体的な考察の未だ行われていない（7）を取り上げたい。

4.『十三世紀フランス語聖書』初期写本と“大学写本”ならびに世俗写本の比較分析

（1）俗語訳写本における註解の位置付け：“二次元的”レイアウトから“一次元的”レイアウトへ

ベルジェによる基礎研究以来たびたび指摘されているように[36]、『十三世紀フランス語聖書』に含まれる註解の多くはいわゆる *glossa ordinaria* に依拠しており、仏語訳の底本となったラテン語聖書が註解付聖書であったことに疑念の余地は無い。就中、Evora 写本（図 3）と Bern 27 を特徴づける、レンマの痕跡をとどめた註解レイアウト[37] は、失われた『十三世紀フランス語聖書』オリジナル写本が、聖書本文の行間や周辺のカラム更にはページ余白にレンマと参照記号を駆使して聖書本文の数倍の量に及ぶ様々な註解を配した（例：図 4）底本の“二次元的”レイアウトを、一定幅で単一のテクスト・カラム内部に聖書本文と註解を交互に配する“一次元的（リニアーな）”レイアウトへと（註解の量を大幅に減じながら）変換する際に、註解とその対象語句の照合関係を可能な限り明確に保持しようとしたこと[38] を、窺わせる。『十三世紀フランス語聖書』の場合、註解とその対象語句の照合関係を明確にするレンマのシステムを反映した作例は Evora 写本（図 3）と Bern 27 のみであり、これ以外の作例では、註解は、本文の文字と同サイズの小型の段落記号やオークルの淡彩を差した冒頭の文字により、あるいは Harley 616 にしばしば見られるように如何なる記号的な目印も伴わず、本文と交互にカラム内に筆写される。

註解付聖書／聖書註解写本に典型的に見られる註解の“二次元的”レイアウトは、13 世紀を通じて数多く制作された『教会法令集』や『ローマ法令集』、更には 13 世紀に入り新たにラテン語に訳されたアリストテレスの著作や医学・天文学・幾何学等を扱う自然科学系テクストの写本など、この時期の“大学写本”に広く応用されている（例：図 6）。13 世紀に入り新たにラテン語訳されたテクストを扱う写本では、予め広く取った余白に本文カラムの半分程度の幅のカラムを罫線により準備し、教授者による更なる注釈の書き込みに備えた作例も少なくない。

一方、註解をいわば島状に本文の周囲に配すことにより、本文の一連の章句の連続性を損なわずに（中断せずに）本文／註解間の双方向の読みを可能にした、13 世紀の“大学写本”に広く見られる註解付テクスト特有のレイアウトを、“リニアーな”（一方通行的な、読み取り順序が固定される）レイアウトへと変換（単純化）する現象は、『十三世紀フランス語聖書』写本に限られるものではない。13 世紀後半にパリで制作された仏語訳ローマ法令集や仏語訳教会法令集などの写本作品でも、かつてラテン語写本において本文を二重三重に囲んでいた各種の註解は、多くの場合、文字の書体やサイズを本文テクストのそれから区別されること無く、小型の段落記号（pied-de-mouche）やペン装飾イニシアル（initiale filigranée）に導かれ、本文と同一カラム内に本文と交互に配される（例：図 5）。（使用者による事後的な）副次的カラムの導入を可能にする予備罫線が余白部分に引かれた作例もあるが、殆どの場合、これらの予備罫線が実際に使用された形跡は無い。

以上の比較は 13 世紀パリの“大学写本”とその“俗語訳版”をシステマティックに取り上げるものではないが、それぞれの分野の写本作品のレイアウト上の特徴と両者の相違を明らかにするのに有効である。本文のリニアーな読み取り（ナラティブ）にむしろ適している俗語訳写本のレイアウトは、しばしば本文を凌駕するヴォリュームを持つ註解の読み取り（講義）を重視する“大学写本”のそれとは、異なる読者環境（使用方法・目的）を想定していると考えられよう。

（2）イニシアル内挿絵（物語イニシアル *initiale historiée*）とカラム（段落形式）挿絵

13 世紀のパリでは、テクストの種類を問わず、ラテン語写本に挿絵が施される場合、カラムの三分の一程度の幅を占める物語イニシアル（イニシアル内挿絵）の形式をとることが殆どである（図 4、6）。数少ない例外は、カノン部分に〈栄光のキリスト〉や〈磔刑〉を表す大型の矩形の挿絵を伴う『ミサ典書』や平信徒用の祈祷書[39]、特殊な本文・註解レイアウトを取るページの中心部にカラム挿絵を配した教会法令集[40]などに限られる。一方、『十三世紀フランス語聖書』や仏語訳ローマ法令集などの俗語写本では、多くの場合、主要なテクスト分節の冒頭にはカラムの幅一杯の矩形の挿絵（カラム挿絵、段落形式挿絵）が施される（図 2、5）。Evora 写本のカラム挿絵を制作した〈デュプラの画家〉もまた、彼が彩飾を手がけた 17 点のラテン語（註解付）聖書では伝統的な形式に則った物語イニシアルを制作しており、両者の間で挿絵の形式が截然と使い分けられている。同様の区別は、パリで活躍する彩飾画家が手がけた“大学写本”とその“俗語訳版”全般にも当てはまり、『十三世紀フランス語聖書』や仏語版ローマ法令集は、上記の例外を除けば、13 世紀パリの彩飾写本におけるカラム挿絵の最も早い導入例であると考えられる。

ここで忘れてはならないのは、ルイ 9 世の第 7 次十字軍遠征を機に 1250-54 年頃パレスティナのアッコンで制作されたとされる散文体フランス語翻案版聖書、通称『アッコンの聖書』（パリ、アルスナル図書館 5211 番写本）[41]であろう。聖書各書の冒頭にテクスト欄の幅一杯の大型カラム挿絵を配した同写本は、聖書史伝の叙述を主眼としてセレクトされた旧約テクストのみを収録する翻案版聖書であるとは言え、散文体仏語訳聖書の先行例がフランス本土ではなく十字軍遠征の拠点であったアッコンにおいて制作されているという点でも、注目に値する。

13 世紀フランスの彩飾写本におけるカラム挿絵の導入は、現存する作例から推測する限り、南ネーデルラント地方と隣接するフランス北部の世俗文学写本がパリに先行すると考えられる[42]。いずれ

の地域にせよ、カラム挿絵が優先的に俗語写本の挿絵形式として定着していたという事実は、『十三世紀フランス語聖書』の顧客環境を探る上で示唆的である。そこには、大学における学問の対象としてのラテン語聖書の読者とは異なる、世俗テクストとしての俗語訳聖書の顧客像を見ることができるのではなかろうか。

5. 結語

本論では、『十三世紀フランス語聖書』の初期写本に注目し、文献学が主導する研究においては考察の射程外に置かれがちな問題視座から、同聖書をめぐる未解決の論点の一つである顧客環境に光を当てることを試みた。その成立環境について、従来の研究では漠然とした推定にとどまっていた「パリ大学説」に対し、本論では、初期写本を構成する様々な要素の物理的な特徴に注目し同時代の“大学写本”やその“俗語訳版写本”と比較することにより、『十三世紀フランス語聖書』には前者とは異なる顧客環境が想定されることを指摘した。

『十三世紀フランス語聖書』現存最古の写本である Evora 写本は、失われた同聖書のオリジナルの様態を探りその成立あるいは顧客環境を推測する上でも、貴重な資料である。同写本の巻頭、創世記冒頭ページ（fol.1）と対になる左側の見返しページには、聖書本体の写字生の筆跡とは異なるがおそらく 13 世紀の手になると思われる、以下のような但し書きで始まる内容一覧（目次）が記されている：§ *Ici desouz sont les livres qui sont bons a lire a lais gens.*（「以下に、世俗の読者が読むに良い（聖書の）書（が列挙されている）」）。仏語訳ローマ法令集など当時の新興分野の世俗写本の読者を顧客に持っていた〈デュプラの画家〉が挿絵を手がけた Evora 写本は、『十三世紀フランス語聖書』成立時のまたとない貴重な証人と言えよう。

註

1　『十三世紀フランス語聖書』に関する最も包括的な解説としては、NOBEL (P.), « La traduction biblique », in GALDERISI (C.), AGRIGOROAEI (V.) (dir.), *Translations médiévales. Cinq siècles de traductions en français au Moyen Âge (XIe-XVe siècles). Étude et répertoire*, Turnhout, 2011, vol. 1, p. 207-223 ; vol. 2, t. 1, pp. 121-123 を参照。

2　『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本に関する個別研究としては、CAMILLE (M.), Visualizing in the vernacular : a new cycle of early fourteenth-century Bible illustrations, in : *Burlington Magazine*, CXXX/1019 (1988), pp. 97-106 ; 拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：最初期の作例について」、『実践女子大学美學美術史学』第 23 号（2009）、pp. (39)-(53)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：〈パリ－アッコンの画家〉帰属作品について」、『実践女子大学美學美術史学』第 24 号（2010）、pp. (39)-(55)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：フランス北部の作例と〈パリ－アッコンの画家〉をめぐって」、『実践

女子大学美學美術史学』第 25 号（2011）、pp. (17)-(38) ; 拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》について」、『実践女子大学美學美術史学』第 26 号（2012）、pp. (17)-(37) ； 拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：地域展開の諸相」、『実践女子大学美學美術史学』第 27 号（2013）、pp. (21)-(42)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：地域展開の諸相（2）」、『実践女子大学美學美術史学』第 28 号（2014）、pp. (19)-(38)；拙論「『十三世紀フランス語聖書』（*Bible française du XIIIe siècle*）彩飾写本研究：ミセラニー写本収録作品」、『パラゴーネ』（青山学院大学比較芸術学科編）第 2 号（2015）、pp. 1-16、および各論文において引用した文献を参照。

3 STONES (A.), *Gothic Manuscripts 1260-1320*, 4 vols., London, 2013-2014 : en part., Part II, vol. 2 (2014), pp. 115-128.

4 BERGER (S.): *La Bible française au Moyen Age. Etude sur les plus anciennes versions de la Bible écrites en prose de langue d'oïl*. Paris, 1884, 3e partie. Cf. MEYER (P.), C.R. de BERGER 1884, in : *Romania*, XVII (1888), pp. 121-141.

5 BERGER 1884, pp. 121-144.

6 BERGER 1884, pp. 112, 145-156. ドミニコ会修道院の 4 巻本大型聖書（Paris BNF, lat. 16719-16722）については BRANNER (R.), *Manuscript Painting in Paris during the Reign of Saint Louis*, Los Angeles, 1977, figs. 93-97, 355, 357-362, pls. VIII, XXV を参照。複数の画家の手になるその彩飾の制作は長期間にわたった可能性があるが、少なくともその一部（ブラナーの分類による「サント・シャペル・グループの画家」の関与部分）は 1280 年頃（cf. BRANNER 1977, figs. 355, 357-362）に位置付けられるべきであると、筆者は考える。

7 BERGER 1884, pp. 111-112.

8 SNEDDON (C.R.), *A Critical Edition of the Four Gospels in the Thirteenth-Century Old French Translation of the Bible*, Ph. D., 2 vols, University of Oxford, 1978, en part., pp. 39-41.

9 SNEDDON (C.), « On the creation of the Old French Bible », in: *Notthingham Medieval Studies*, XLVI (2002), pp. 25-44, en part., pp. 40-44.

10 QUEREUIL (M.), *La Bible française du XIIIe siècle. Edition critique de la Genèse*, Genève, 1988, en part., p. 11-12.

11 BERGER 1884, pp.187-199.『増補版歴史物語聖書』については、NOBEL 2011, vol. 1, p. 207-223 ; vol. 2, t. 1, pp. 135-137 ; FOURNIE (Eléonore), *L'iconographie de la Bible historiale*, Turnhout, 2012 ; KOMADA (A.), *Les illustrations de la Bible historiale : manuscrits réalisés dans le Nord*. 4 vols, Thèse de Doctorat du 3e cycle, Université de Paris –IV, 2000 を参照。

12 Cf. BERGER 1884, pp.111-112, 121-144.

13 Cf. 拙論 2012。

14 Cf. 拙論 2014。

15 Cf. 拙論 2011。

16 BERGER 1884, pp. 111-119, 448.

17　Cf. 拙論 2013。

18　Cf. 拙論 2011。ベルジェはこの写本を『増補版歴史物語聖書』後半部とするが（BERGER 1884, p. 383）、C. スネッドンはこれを否定している：cf. SNEDDON 1978, t. 1, cat. no. 24, pp. 181-184。挿絵彩飾の様式分析から推定される同写本の制作年代（1270 年代中頃）も、ベルジェの見解を否定する。

19　Cf. 拙論 2010。

20　Cf. SNEDDON 1978, t. 1, p. 64 ; Idem., The Origins of the ‘Old French Bible’ : The Significance of Paris, BNF, ms. fr. 899, in : *Studi francesi*, CXXVII (1999), pp. 1-13, en part., p. 10 ; Idem., Rewriting the Old French Bible : the New Testament and Evolving Reader Expectations in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries, in : SAMPSON (R.), AYRES-BENNETT (W.), éd., *Interpreting the History of French. A Festschrift for Peter Rickard on the occasion of his eightieth birthday*. Amsterdam / New York, 2002, pp. 35-59, en part., p. 38 ; スネッドンの提案するステマについては、拙論 2013 の挿図 A も参照。

21　QUEREUIL 1988, pp.37-52.

22　BRANNER 1977, pp. 102-107, 229, figs. 281-300.

23　STONES 2013, Part I, vol. 2, pp. 32-33.

24　同様のアンテナ装飾とその制作年代については、GOUSSET (M.-Th.), La décoration du ‘prototype’ et des manuscrits liturgiques apparentés, in : BOYLE (L.), GY (P.-M.), éd., *Aux origines de la liturgie dominicaine : le manuscrit Santa Sabina XIV L 1* (actes du colloque international organisé par la B.A.V, l’Ecole française de Rome, l’I.R.H.T. et l’Institut historique Dominicain, Rome, 2-4 mars 1995), Paris / Rome, 2004, pp. 43-57, figs. 1-16, en part., pp. 54-57 を参照。

25　KOMADA (A.), La première génération de la *Bible française du XIIIe siècle* (communication orale dans le colloque international « *La Bible médiévale – du Roman au Gothique* », Lisbonne, B.N. du Portugal, le 3 nov. 2015) ; Eadem, La première génération de la *Bible française du XIIIe siècle* (article), in : *Lusitania Sacra*（近刊）.

26　STONES 2014, Part II, vol. 2, p. 115. ただし同写本の制作年代については、1250 年前後とする。

27　Cf. 拙論 2011。ただし、ここで筆者の提案した 2 写本の制作地および制作年代については、見解を修正する必要があろう。

28　Cf. ESCANDELL PROUST (I.), Les trois manuscrits bibliques issus de l’atelier de Magister Raimundus, in : *Lusitania Sacra*（近刊）.

29　Cf. STONES 2014, Part II, vol. 2, p. 115 ; A. ストーンズは言及していないが、Rouen 185 の 3 人の彩飾画家のうちパリで活躍した 1 人が『ノルマンディ慣習法』を含む法令集の挿絵彩飾を担当していることに拠る判断であろう。

30　西欧中世のラテン語註解付聖書写本については、DE HAMEL (Ch.), *Glossed Books of the Bible and the origins of the Paris Booktrade*, Woodbridge, 1984 を参照。近年では、フランス国立研究機構（C.N.R.S.）の一部門である文献史研究所（I.R.H.T.）内に設置された研究グループの HP（http://glossae.net/fr/node/250）が、聖書註解研究における問題視座を整理している。レンマの

定義については同 HP 内の用語集（http://glossae.net/fr/content/vocabulaire-technique-de-la-bible-au-moyen-age-work-progress）を参照。

31 上記の註 25 を参照。

32 Bern 27 については、稿を改めて論じる予定である。

33 Cf. BRANNER 1977, pp. 78-80, 218-219（カタログ）, figs. 185-198：ブラナーはカタログにおいて計 19 点の写本に〈デュプラの画家〉の関与を認めているが、筆者はこれらのうち 3 点を同画家の作品コーパスより除外し、新たに 16 点の写本を加えることを提案した。*Lusitania Sacra* に発表する拙論を参照。

34 BERGER 1884, pp. 145-156, en part., p. 156.

35 本論で筆者が“大学写本”と呼ぶ写本に対して、テクストの種類や写本の書冊学的な特徴などを基準に明確な定義を与えることは困難である。13 世紀にフランス（パリ）の大学で用いられていた写本については、差し当たり以下の文献を参照：DE HAMEL 1984 ; Idem., *A History of Illuminated Manuscripts*, 2nd edition, London, 1994, chap. IV ; BATAILLON (L.) et al., *La production du livre universitaire au Moyen Age. Exemplar et pecia* (Actes du symposium tenu au Collegio San Bonaventura de Grottaferrata en mai 1983), Paris, 1991 ; VALLET (E.) et al., *Lumières de la Sagesse. Ecoles médiévales d'Orient et d'Occident* (catalogue d'exposition), Paris, Publication de la Sorbonne / Institut du monde arabe, 2013 ; VERGER (J.), WEIJERS (O.), éd., *Les débuts de l'enseignement universitaire à Paris (1200-1245 environ)*, (Studia Artistarum 38), Brepols, 2013; CAHU (F.), *Un témoin de la production du livre universitaire dans la France du XIIIe siècle : la collection des Décrétales de Grégoire IX* (Bibliologia, Elementa ad librorum studia pertinentia, 35), Brepols, 2013.

36 Cf. BERGER 1884, p. 122 sqq. ; QUEREUIL 1988, p. 13 sqq.

37 この問題については、*Lusitania Sacra* に発表する拙論（上記の註 25 を参照）で詳しく論じている。

38 この問題については、*Lusitania Sacra* に発表する拙論（上記の註 25 を参照）で詳しく論じている。

39 例えば、STONES 2013, Part I, vol. 1, ills. 1-7, 41-43, 52, 53, 64-69 を参照。

40 例えば、STONES 2013, Part I, vol. 1, ills. 78-84 を参照。

41 『アッコンの聖書』については、WEISS (D.), *Art and Crusade in the Age of Saint Louis*, Cambridge U.P., 1998 ; NOBEL (P.), *La Bible d'Acre. Genèse et Exode. Edition critique d'après les mss. BNF nouv. acq. fr. 1404 et Arsenal 5211*, Besançon : Presses universitaires de Franche-Comté, 2006 を参照。

42 例えば、STONES 2013, Part I, vol. 1, ills. 305-311, 315-317, 328-330, 526-529, 751-766, 781-788, 801-810 を参照。

図 1
パリ、フランス国立図書館、フランス語 899 番写本
『十三世紀フランス語聖書』フォリオ 233

図 2
エヴォラ、公立図書館、Cod. CXXIV/ 1-1 番写本
『十三世紀フランス語聖書』フォリオ 1

図 3
エヴォラ、公立図書館、Cod. CXXIV/ 1-1 番写本
『十三世紀フランス語聖書』フォリオ 1　部分拡大図

図 4
パリ、フランス国立図書館、ラテン語 448 番写本
『詩篇註解』フォリオ 218

図 5
パリ、フランス国立図書館、フランス語 495 番写本
『仏語訳ローマ法令集』フォリオ 157 v

図 6
パリ、フランス国立図書館、ラテン語 12953 番写本
『アリストテレス著作集』フォリオ 166